

平成 29 年度 第 2 回白馬高校学校運営協議会 議事録（概要）

1. 日 時 平成 29 年（2017 年）7 月 19 日（水）午前 10 時～12 時 00 分
2. 場 所 長野県白馬高等学校会議室
3. 参加者 9 名（欠席 1 名：横川委員）
この他、長野県教育委員事務局高校教育課 2 名
白馬・小谷両村関係者 3 名
白馬高等学校職員 3 名



写真は当日の授業の様子

4. 次 第

- (1) 開会の言葉
- (2) 長野県教育委員会挨拶（塩野高校教育課長）
- (3) 白馬高等学校長挨拶（北村校長）
- (4) 授業参観（国際観光科・普通科）
- (5) 報告事項
○学校の現状報告・資料説明等（北村校長）

(6) 審議事項

①意見交換

<岸委員>

- 白馬高校に国際観光科ができたことは多くの方が知っているけれども、昔と比べて白馬高校がこんなにも変わったということを村民の皆さんがご存じない。広く村民の皆さんに今の白馬高校を理解してもらえる場面をつくってもらいたい。
- 国際観光科に期待される役割の一つに地域貢献がある。定員のうち何割が県外生というようにできればいいが、今のところ地元の生徒の入学が安定していないという状況。
- 白馬・小谷のイメージは、観光とスポーツと同じくらい。全国的には、スポーツのイメージが強い。スポーツマネジメント関係の方に、9月から年3回くらいスポーツマネジメントの講座を白馬高校で、担当してもらおうことになっている。

<武田委員>

- 最初から英語が分からなくても良いので、高校3年間で、分かる力をつけてくれる高校なのだということをPRすべきである。授業の中で、あれだけ多くのネイティブスピーカーの外国人の先生がいるので、実用的な英語の授業をやっているということアピールすることから始めてはどうか。大町市美麻地区にも白馬高校に入学させたい生徒がいる。しかし、交通の便が良くないので、学校としては志望を躊躇している現状だ。
- 1年後に国際観光科の卒業生を送り出して、白馬高校の将来的な見通しが決まると思う。外から来る子が、ここに住み着く可能性があるということも大切な視点だ。山岳同好会顧問に専門の先生も加わり、地元の子たちも来るようになるのではないか。

<横澤委員>

- 現在の白馬高校の姿を白馬・小谷両村民は知らないと思う。行政側も含めて、白馬高校が一新して良くなっていることを伝えてほしい。
- 授業参観の中で、『商品開発』の授業があったが、白馬・小谷両村にも、それぞれの良いものがあるので、白馬高校としても商品開発をして、ぜひPRしてもらいたい。
- 最優先課題として、地元からくる子どもたちをしっかりと確保してもらいたい。白馬・小谷の子ども達もここで礎をつくり、その後県内外に出ても最終的には、故郷にもどってくるようになればよい。

<宮嶋委員>

- 校長先生との面談結果の中で、マイナスの内容が少ないのに驚いた。地元のこと視野に入れながら受験生は、白馬高校を選んでいくということが分かり嬉しかった。しろう

ま祭に中学生が友達同士で誘い合って訪れ、高校の事知ろうとする姿があった。

- 自分には、小学生の子どもがいるが、白馬高校の広報ちらしを子どもがもってきて、びっくりした。しかし、国際観光科ができたことは知っていても、具体的なイメージが湧かなかったので、このような広報で、具体的なことがわかり有り難かった。

<奥原委員>

- しろま祭に訪問させていただいた。特に、音楽祭は、生徒の熱気が伝わってきて良かった。展示や、模擬店も工夫がされていて、昨年度の150%の来客数というのも頷けるものだ。6年前と比べると生徒の意欲、明るさ、授業への姿勢が、非常に良くなっていて、高校生活を満喫していると感じられた。
- 今日のイングリッシュデーでも、英語で生徒に尋ねてみると、楽しいとか、これからも続けたいとか、前向きな答えがきちんと英語で返ってきた。発音もとてもきれいだった。こういうことを白馬高校も地元の方や中学生により理解してもらって、入学者を増やしていくことにつながっていけばいいと思う。
- 今年度、国際観光科は小谷中から0人だった。地元の高校だけでなく長野や松本まで考えると、今年度と来年度との進学希望状況は、今までの実績からあまり違いが出ないかもしれない。そこで大事になってくるのが、PRではないかと思う。

<松本委員>

- 寮については、当初どんなに多くても45名程度と考えていた。実際には、来年度入寮できる余地がほとんどない状況だ。今後最大で30人増ということで考えると全体で75人。国際観光科は各学年40人の1クラスの中で寮生25人。地元の子が15人。そのように考えているが、皆さんどうか。

<下川委員>

- 白馬村で考えていることを、小谷村長に代表して言ってもらった。来年度の入寮生のために、増築を来年の2月にも完成させていないといけな。白馬高校も元気が出てきて好感が持てるという状況なので、そういうことを地元の中学生にもPRしてもらいたい。寮生は、白馬駅でのデスティネーションキャンペーンにも積極的に参加していて、地域にもさまざまな場面で貢献している。

<北村委員>

- 全国から来る子どもと地元の子どものが、机を並べて学習することの効果というものは、極めて大きなものがあると考えている。科を越えたミックスの授業もあるので、普通科の生徒にも他県生との接点がある。小中学校と固定的な友人関係で、高校でもそうかと思っていたが、白馬高に来たら県外生とも友達になれて、そのこと自体が白馬高校に来て経験できた良い面だと認識している地元の生徒も多い。教育効果を考えた時に、各学年、国際観光科40人の中の25人という考え方ではなく、普通科も含めた80人の中の25人という考え方でもできると思う。

<白戸会長> まとめ

- まだ卒業生が出ていない時点で、新生白馬高校や国際観光科の成果を問うのは難しい面がある。かなりの手応えを、皆さんも感じていると思う。外から来た人と、ここで育った人たちが一緒に学ぶということにこの高校の面白さや特徴がある。お子さんを持っている人にとっては、白馬高校のあり方が自分のこととして感じられるが、そうでない地元の人に、高校のあり方が自分に関わることだと、どれだけ認識してもらうことができるかが重要だ。保護者だけでなく、地域の人たちにも良い学校だから、知り合いがいたら行かせる、孫がいたら行かせるというようなアピールを、学校側だけでなく、地域の側もやっていく。地元の子と県外から来た子が同じ学び舎で学ぶということの教育効果は確かにある。この子たちが、将来地域に貢献してもらえるような仕組みをつくるのも地元の責務だと思う。

(7) その他

- 第3回学校運営協議会は10月～11月を予定

(8) 閉会の言葉